
現代妖怪図鑑

腐れ大学生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代妖怪図鑑

【ZPDF】

Z0670M

【作者名】

腐れ大学生

【あらすじ】

現代に生きる妖怪に対する基本的な知識を身につけ、その危険性を喚起することにより、諸兄らに日常での注意を怠らないようにして頂き、妖怪の悪戯の被害者を少しでも減らそうと思い筆を執った次第である。

序章

現代の妖怪図鑑を作りつ。

そう思い立つたきっかけはようやく冬将軍が退陣し、世の中が春といつ季節を受け入れたある日に起じつた。私にとつては悲劇であつたが、諸兄らにとつてはおそらく喜劇であるだらう。

その日、私こと佐野征十郎は近所の商店街の店々を冷やかすのに余念がなく、世間の生命出する春とは正反対の泥沼のような青春を謳歌していた。

当日の大学における講義は全て自主休講である。日々深遠なる思索にふける私には、このぐらこの休息は当然の権利といえよつ。

しかし、天は何を勘違いしたのかこの考える葦たる私に天罰を与えたのである。

前方から自らが高等学校の生徒であることを示す制服で武装した乙女が歩いてくる。

紳士足る私は当然彼女をいやらしげ目で見ることもなくすれ違おうとしたのだが、そのとき唐突に一陣の風が吹き抜け、彼女の武装の一部をめくりあげた。

具体的に言えば、スカートの内側が衆目に晒されたのである。私の眼差しが一点に釘付けになつたのも不可抗力と言えよう。

しかし、彼女はどうやらそうは思わなかつたようで私は彼女から手酷い罵倒を受けることになつた。あまりに理不尽である。

先ほどの風は私に対して悪意を持っていたと断ぜざるを得ない。

さりに、ここで思考を止めないのが私の私たる所以である。果たして自然現象である風が悪意など持つものか。さすがの私も自然を

敵に回すほど環境破壊を進行させているわけではないはずである。

では人為的なものか？

妄想は膨らむ。

否、いかな人間とてあるような風を狙つて起りすのは不可能だろ
う。

ならば結論は…

「妖怪だな」

古来より人に害なすものと言えば妖怪と相場が決まつている。それ
に妖怪ならば、風くらい朝飯前に吹き荒れさせることができるので
う。

勝手に下した結論に勝手に満足した私の脳裏にひとつ懸念が生
じた。

現代人はあまりに妖怪に対して無防備なのではないか。まさかこの
科学の世において妖怪などという存在に自分が襲われるはずがな
いと、思い込んでいいのではないか、と。

由々しき事態である。

私はせめて自分の守りだけでも固めようと、商店街からの帰路の
脇にあつた祠からいわくありげな札を引きはがし、その札を我が家
の玄関に張り付けたのであった。

序章（後書き）

初めて投稿させていただきました、腐れ大学生と申します。
稚拙な文章ではありますが、楽しんで読んでいただければ幸いです。

丑三つ時。私は玄関の扉が連打される音で目を覚ました。このような時間に訪ねてくるようなやつは妖怪か幽霊か、はたまた新聞の勧誘かＮＨＫの集金に違いない。私は居留守を用いることにした。

三十分後。訪問者は我が家の扉を叩き続けている。親の仇か何かなのだろうか。

このままでは私は安眠できない。それに我が家がそろそろ耐久力の限界を迎えるかもしれない。

ここにひつ我が家を紹介しておこうと思つ。私が現在下宿しているのは大学近辺に存在する山月荘という名のボロアパートである。正確なことはわからないが、その外観からして少なくとも築八十年は超えているだらう。

建物は一階建てで、私の部屋は一階の左端に位置している。私の部屋は六畳で、キッチンとトイレは完備されているが風呂は存在しない。

夏場は風通しがよく涼しいのだが、冬場はまだ外のほうが暖かいのではないかと大学の友人に評されるほどに寒い。しかも歩くたびに部屋の床が嫌な音を立てる。底を抜かさないために、私は我が家 の内ですら抜き足差し足を余儀なくされている。

なぜ私がそのような廃屋寸前のアパートに下宿しているのか。理由は一つ。家賃が安いのだ。

具体的にいえば月千円である。この破格の値段はここの大業が私の実家と縁があるとかいった理由があるのだが、どうでもよいので省く。

話が逸れすぎた。

以上から現在の状況を想像してほしい。玄関前の訪問者が行っていることは、八十歳を超える老人を三十分間叩き続けていることと同義である。大惨事である。敬老の精神のかけらもない。

それも扉の叩き方が徐々にリズミカルになってきている。訪問者は我が家の玄関で作曲を行うつもりらしい。無駄にうまいのが腹が立つ。

「のままでは玄関が伝説の曲が生まれた場所として、世界中のアーティストの聖地となってしまいかねない。そうなれば安眠はなお不可能である。

そう判断した私はようやく重い腰をあげ、玄関の扉を開いたのだった。ちなみにローンだとそういうものは一切ない。自分自身は自分で守るしかないのだ。

果たしてそこに立っていたのは、一人の少女であった。なぜか浴衣を着ていて頭の側面に狐の面をひっかけていることを除けば、至極見目麗しい普通の少女である。

少女は当初の目的を忘れて作曲に夢中になっていたらしく、私が玄関を開くと鬼が豆鉄砲をくらつたような顔をして飛びのいた。構わず要件を問うことにする。

「このよろづ時間に何の用か。交際の申し込みと嫁入り以外の用件ならば、断固として拒否させていただく。壺も絵も買わん。」

少女はようやく正気に戻つたらしく、氣の強さを示すよつた切れ長のつり口を輝かせて言い放つた。

「佐野様がそうお望みになるのならば、喜んで交際でも、嫁入りでも、悪徳商法でもさせていただきます。」

「Jの少女、奇妙なのは格好だけではないらしい。口調は妙に慇懃であるし、発言の内容も「男が人生で一度は言われてみたい言葉ランキング」にランクインしそうなものである。

「どういうことだ。いつたい何が目的だ。金ならないぞ。」

「お金などいりません。私は恩返しに参ったのです。」

まづまづ訳がわからない。私は恩を売られることはあっても、断じて他人に恩を売るような真似はしない。情けは人のためならず。佐野様、情けは人のためならずは情けをかければそれはいずれ巡り巡つて自分に返つてくる、という意味です。」

「どうやら口に出していたようだ。しかしこの少女、内容はともかく口調はしつかりとしているし、頭が残念な人物ではないようだ。

「恩返しとはどうのことだ。私はまず貴君のことを知らないぞ。「知らぬのも無理はございません。私はあなたが札をはがした祠に封じられていた狐ですから。直接お会いするのはこれが初めてでござります。」

思わず玄関に目を向ける。確かに私は昼間、そこにいわくありげな札を貼つた。だがあの祠から札をはがしたとき、周囲には誰もいなかつたはずである。背を冷や汗が伝つ。

「言いたいことはわかつた。だが貴君が狐であるなどとは信じられぬ。証拠を見せよ。」

「わかりました。」

人が狐を騙つているのならば、証拠を見せよなどと言われたら多少なりともひるむはずである。しかしこの少女は「わかりました。」と即答した。全身を鳥肌が覆う。

少女は頭の側面につけていた狐の面を被つた。私は拍子抜けした。まさかこれで正体を見せましたなどといつもりなのだろうか。

「これが私の真の姿です。」

「言つつもりだつたようだ。恐怖から解放され、安堵のため息をついつとしたとき私は見た。見てしまった。

仮面が、まばたきを、している。

「私が狐であると信じていただけましたか。」

「それは、その、トリックの類ではないのか。」

「まだお疑いですか。わかりました。では私の顔を横から見てください。触れてもかまいませんよ。」

仮面と顔の継ぎ目がなかつた。思わずその頬に手を伸ばしたが、仮面と思われていた部分からは確かに体温を感じられた。ここまで非現実的なことに見舞われると、人はむしろ冷静になるものである。

「わかつた。貴君が狐であることは信じよつ。ところで、貴君は私に危害を加える意思はないのかな。」

部屋の中に妖怪相手に立ちまわれそうなものは、ない。

「無論、恩人に危害を加えるほど墮ちはおりません。先ほども申し上げたように、私は恩返しに参ったのです。さあ、なんなりとお申し付けください。」

ひとまず安心、だろうか。危害を加える意思がないと分かれば後は体よく帰つていただくだけだ。日々を過ごすだけで精一杯だとうのに、この上超常のものと関わつてたまるか。

「ああ、恩返しの前にお願いがあるのですが、私をここに住まわせていただけませんか。」

なんと、退路を断たれてしまつた。

「何故だ。札をばがした程度のことならば気にしなくてよい。早く封じられる前に住んでいた場所へと帰るがよいだろ。」

「そろはいかなくなつたのです。私は封印が解かれた後、真っ先にかつて住んでいた森へと向かいました。しかし時すでに遅く、私の住居は人間による開発の臺き目にあつていたのです。もはや私に帰るとこりはな」「やめておいてください。」

そう言つて顔を伏せた狐を見て、私は考える。この者の住居がなくなつたのは私のせいではないにしろ、少なくとも人間のせいではある。ならばこの狐を救済すべきなのもまた人間なのではないか、と。弱々しい狐の姿を見ているつち、不思議と恐怖は消え失せていった。

「よからう。一生、といつわけにはいかぬが、新しい住居が見つかるまでここを貴君の住処とするがよからう。その代わり、家事をしてもらつね。風呂もないぞ。」

狐が顔を上げる。狐は泣いていた。

「有難うござります。この恩は一生忘れません。」

「恩など感じずとも好い。春とはいこの時間はまだ寒いだらつ。家に上がるといよ。」

そうして我が家に居候が増えた。しかしここで解決せねばならない由々しき問題が発生する。

「生活費、ですか。」

「ああ、現在の我が家家の財政は私一人を養うだけでも大変なほどなのだ。この上さらに一人増えたとなれば、財政破綻の一途をたどることとなる。」

「少なくとも私に食費は必要ありませんよ。食糧くらい自分で調達できますから。雨風しのげる場所があればよいのです。」

なるほど、それなりに今までとさせじ変わらぬ生活費で日々を繋げるかもしれぬ。

「しかし、佐野様の将来のためにもお金はあるに越したことはないかもしれません。ぜひとも今のうちに稼いでおきましょう。がつぱっと。」
「理ある。金はいくらあっても困ることはない。生きるとこついとはとかく金がいるのだ。」

「良い方法を知っているのか。」

「それをこれから考えるのです。」

「何だ、貴君は妖怪であるからして、何か妖怪らしい方法で簡単に金を稼げるのではないか。」

「私は頭脳派ですので、術の類は苦手なのです。せいぜい木の葉を野口英世に変えるぐらいがやつとなのです。」

「福沢諭吉ではないのか。」

といつより通貨偽造だ。まだ私の人生設計に檻に入る予定はない。

「では早速その頭脳とやらを働かせてくれ。できるだけ肉体労働を伴わないものが良い。私も頭脳派なのでな。」

「では、本などお書きになつてはいかがでしょう。当たりさえすれば、後は黙つても印税がつぼがつぼです。」

「の狐、長年封印されていた割に随分と考えが世俗染みている。

「しかしそう簡単にいくのなら、人口の八割は物書きをしているだらう。そうでないということは、簡単にはいかぬ職業であるということだ。」

「佐野様、物書きで売れつ子になるためには、誰も体験したことがないような面白おかしいことをつらつらと書きつづるのが一番の近道であると私は考えます。それが日常で役立つことならさらにも良い。」

「確かにその通りであるが、私は人よりも面白おかしい人生を歩んでいるつもりはないぞ。」

私の日常を書いたところで、せいぜい折り鶴にされて病床の美少女の枕元に置かれる程度であろう。悪くない。

「佐野様、灯台下暗しとは正にこのこと、貴方様の目の前にいるのは一体何ですか。」

盲点であった。確かに目の前にはこれから我が家に住み着く予定

の狐がいる。世界中のどこのを探しても、妖怪と同居している人間はなかなかにいないだろつ。まさしく誰も体験したことがない、面白いおかしい状況である。

「そりて言つならば、佐野様は既に私といふ怪異と関わってしまいました。一度怪異に遭つてしまつたものは後々も遭つようになるといわれます。」

「それは喜んでよいのか。」

「本に書くネタが向こうからやつてくると考えればよいのです。」「つまり売れっ子になるための条件の一つは満たしているわけだ。後はいかにして私の書を世間の人々の日常に役立たせるか、だ。」

そのとき脳裏によぎつたのは毎回の忌まわしき出来事である。そのとき考えたことは、現代人は妖怪に対して無防備すぎるのではないか、ということだ。

「現代の妖怪図鑑を作らうと思つ。」

「図鑑でござりますか。それは又何故。」

「現代人はあまりに妖怪に対して無防備すぎる。そのような状態でもし妖怪に襲われたらひとたまりもないだろつ。だが、その時手元に現代の妖怪に対する対策が書かれた本があつたとしたらどうだろう。」

「なるほど、佐野様はおそらくこれから多くの怪異を経験なさるでしょうから、妖怪の情報は非常に正確なものとなるでしょう。ならばその対策も容易に立てられるというものです。これなら人々の役にも立つ。素晴らしいお考えです。」

「そうだろう。これならば世間の人々を妖怪の被害から守ることができる、私は印税でがつぽがつぽである。」

正に一石二鳥。何やら明るい展望が見えてきた。どうやら私の将

来は薔薇色いろしへ。

「では今後の方針も決まったところで、そろそろ眠るとしてよ。」

「そんな。もう少しお話ししましようよ。長い間話す相手がいなくて

フラストレーションが溜まっているのです。」

「貴君は自分が何時に訪ねてきたか理解しているのか。頭脳派が聞いてあきれる。」

現在時刻午前四時。忘れてはいけない。今は深夜なのである。

「なあ貴君、貴君は妖怪であらう。」

靈柩車の運転席に座る男が心底哀れんだ眼を私に向けてくる。
しかし私はくじけない。なぜなら私は人々を妖怪たちの魔手から
救い出すという重大な使命を担っているからだ。ついでに印税も入
ればなおよい。

狐曰く、「ふらふらじていればそのうち怪異に行き会こますよ。
町をうろついてました。

適当なことこの上ない。

しばらく歩くと、葬儀場が見えてきた。どうやら今日は葬儀が行
われているらしい。喪服に身を包んだ人々がちらほらといるのが見
える。

葬式というのは、死者のためのものではなく残された遺族のため
の儀式であると聞いたことがある。儀式を通じて、もはやあの人人は
この世にいないのだと確信するための儀式。一種のイニシエーショ
ンなのである、と。

だが、私は葬式は生者だけのためにあるとは考えない。それはま
ぎれもなく、死者のためにもなっているからだ。なぜなら生者が死
んだ者を既にこの世にないと確信することは、死者がこの世に未
練を残さないために重要なことであるからだ。

魂というのは纖細なもので、肉体という鎧に包まれていなければ、
この世に存在しているだけで汚れを蓄積していく。未練を残して魂

だけでこの世に留まれば、魂は汚染されてしまつて輪廻の輪に加わること叶わず、成仏できなくなつてしまふかも知れない。

つまり、葬式とは死者を成仏させるための手助けにもなつてゐる

と、私は考える。

葬儀場から棺桶が運び出される。どうやら隨分と長い間立ち止つていたようだ。

棺桶を運びこむ靈柩車、その運転手を見たとき私は予感した。あれは人ではない。そしてその性質からあれが何であるかも分かつた。私は靈柩車へと足を向けた。冒頭に戻る。

「なあ貴君、貴君は妖怪であろう。」

「はあ。大丈夫ですか。これは靈柩車であつて救急車ではありませんよ。頭の病院には参りません。」

頭の残念な人呼ばわりをされてしまった。妖怪の分際で生意氣な運転手は呆けた顔をしているが私は騙されない。死体を守るためにもここで逃がすわけにはいかないのだ。助手席に乗り込む。

「ちょっと、何の真似ですか。あなたは遺族の方なのですか。」

「否、遺族、縁者、近所のお兄さんのいぢれでもない。後ろの仏とは赤の他人だ。だが赤の他人とは言え、妖怪の餌食になろうとしているのを見過ごすわけにはいかぬ。」

「訳のわからないことを言つていないので、早く降りてください。これから火葬場へと向かわなければならぬのです。」

「貴君はおそらく火車だろう。」
「まだ認めようとしないが。ならばひとつ正体を言い当てるやるにしよう。

「貴君はおそらく火車だろう。」

火車とは罪人の死体をさらうと謂われる妖怪である。その名の通り火のついた車輪を駆った姿をしている。ちなみにさらつた死体は灼熱地獄の業火に放り込んで、地獄の業火を維持するための燃料としているらしい。

「靈柩車の運転手とは、火車の性質そのものである。葬儀場から死体を運び、火葬場にて焼く。運転手たちの中に火車が紛れ込んでいても何ら不思議はない。じわくさに紛れて死体をさらおうとしているのだな。」

「待つて下さい。暴論です。私は妖怪なんかじゃありません。この死体だって、間違いなく火葬場まで運ぶつもりです。一体何を根拠にそのようなことを仰るのですか。」

しぶといやつだ。まだ認めようとしない。私はさらに運転手を問いつめようとして、そこで異変に気付いた。

いつの間にか車が走っている。それに周りの景色もなんだかおかしい。黒々とした尖った筋がそこかしこに立ち並び、ところどころにある窪みには赤い液体溜まつており、その表面はまるで沸騰しているかのように泡を吹く。その景色はまるで地獄の様相を呈している。

「運転手、これは明らかに尋常のことではない。貴君が本当に人間だというのなら即刻引き返すべきだ。早く戻ろう。」

「尋常でないのは当たり前。ここは地獄なのですから。それに言つたでしょ。死体を火葬場まで運ぶ、と。」

「こいつ本当に火車であったのか。話しているうちに間違つているのは私な気がしてきて、いかにして病院に連れて行かれる前に逃げるかを考え始めていたというのに。」

「貴様、今すぐに私と死体を現世に返せ。このようなことが許されると思つていいのか。」

「罪人の死体など、どうだつて良いではないですか。後ろの仏は酷いやつですよ。生前に動物を虐待していたのです。それにこれはもう空っぽです。魂の抜けた、ただの器ですよ。」

「ふざけるな。私は知つているぞ。火車にさらわれ、地獄の業火でその肉を焼かれた者の魂は、永劫灼熱地獄に囚われ責め苦を味わい続けねばならんのだ。いかに罪人といえど、永劫の苦しみを受けようとしているのを見過することはできん。」

私がそこまで言つたとき、火車は不意に黙り、そして私に寒氣のするような嫌な笑みを向けた。嫌な予感がする。

「わかりました。そこまで仰るのなら、後ろの死体は予定通りの火葬場へと運びましょう。ただし、条件があります。」

思わず唾を呑みこむ。

「条件とは、何だ。」

「あなたが死体の代わりに燃えるのです。」

馬鹿な。私はまだ生きている。

「生きていようと、死んでいようと、そんなことは関係ありません。万物一切地獄の業火に放り込めば、素敵な燃料となるのです。」

「待て、私は罪人ではないぞ。そんなことをしては閻魔に怒られるのではないか。」

「罪人を燃やすのは、罪がこびりついた死体のほうが、より良い燃料になるからです。ですが私が指示されているのは、人間を一人放

り込め、ですからノルマさえ果たせれば、私にとつては燃えるのはあただろうが死体だろうがどちらでもよいのです。」

いつの間にか車は崖の突端のような場所に出ていた。地面はほとんど車の幅しかなく、車から降りようとすればそのまま真っ逆さま、といった具合だ。思わず下を覗き込むと、そこにはただ圧倒的な熱量を持つた赤が広がっていた。

「す、いじょう。おそらく生者でここへ来たのはあなたが初めてですよ。おめでとうございます。やよひなら。」

助手席のドアが勝手に開く。タクシーか。

火車が私の体を蹴り、灼熱地獄へ放り込もうとする。妖怪だけあって、その力は強い。私は車の天井についている持ち手に掴まって必死に耐える。日頃から体を鍛えていたことが悔やまれる。

「おいよせ、暴力はやめる。私は痛いのと熱いのが大嫌いなのだ。
「『安心ください。地獄の業火ならば熱いと感じる間もなく燃え尽きる』ことができますよ。まあ死後にたっぷりと責め苦が待っていますが。」

「待て、話し合おう。交換条件だ。見逃してくれれば、私の財布を貴君に渡そうではないか。」

「どうせ子供銀行券くらいしか入っていないのでしよう。お断りです。」

失礼なやつだ。さすがの私でも赤銅の硬貨くらいは持ち合わせている。しかし、まさか妖怪が斯くも恐ろしいものであつたとは。今後は気をつけよう。

「話し合いつことなどありません。それにあなたに生きていられると

私が困るのです。もしあなたが私が火車であると世間に広めれば、仕事がやり辛くなる。もしかしたら職場を首になるかも知れない。妻子を路頭に迷わせるわけにはいかないのです。」

結婚していたのか。なんとうらやましい、どこまでも腹の立つ奴め。そう思ったところで私はついに力尽き、持ち手を手放してしまった。

「さよなら。約束通り、後ろの死体は予定通りの火葬場へ運んでおきますよ。だから安心して燃え上がってください。」

私は断末魔の叫びをあげながら、万有引力の法則に従い、広大な赤へと落下していった。

「おかえりなさいませ、佐野様。」

同居人の狐が出迎えの声をかける。私は返事をするほど元気がなかつたので、首を縦に振つて応えただけだった。

私がせんべいの「」とき薄さの座布団を枕として寝転がるうとしているといふと、狐が再び声をかけてきた。

「これは、私が問つてよことなのかどうか、迷つたのですが。」

なぜか頬が赤みを帯びている。

「何だ、言つてみろ。」

狐はそれでも口もれる。よほど聞こづらうことなのだろう。しばらく私の顔を見つめた後、ようやくこいつ問つた。

「何故、全裸なのですか。」

ああ、そういうえば帰るのに必死で自分が全裸であることを忘れていた。よく通報されなかつたものだ。しかしこの狐、私の裸なんぞで頬を染めていたのか。私の何倍も生きているだろうに、以外と初心なやつだ。

「これにはやむを得ぬ事情があるのだ。だから受話器をあけ。この件に警察を介入させるのはあまりに早計だ。」

「ならば早くその事情とやらを説明してください。ポル野様。私はあなたに嫁入りする覚悟すらありましたが、露出癖の変態を伴侶と

する覚悟ではありません。まずはその趣味を矯正してさしあげます。これもまた恩返し。」

「誰がポル野だ。私は佐野だ。しかしこれは不味い。狐の指が電話機の番号の1と0の間を高速で行き来している。イメージトレーニングは大切であるが、今回ばかりは私にとつて都合が悪い。早急に事情を説明せねばなるまい。一難去つて、また一難。

「実はな、火車に灼熱地獄に連れて行かれ、地獄の業火に放り込まれたことにより服が焼けてしまったのだ。」

電話機の番号を押したことを示す電子音が部屋に響く。とっさに電話線を引きぬいて事なきを得る。狐は電話の仕組みをまだ十分に理解していないらしく、繋がるはずもない受話器に呼びかけ続けている。阿呆め。頭脳派が聞いてあきれ。

しかしながら警察の呼び方は知っているのだ。よくわからない狐である。

「信じられないのもわかる、だが事実なのだ。受け入れてくれ。」「私はそれよりも、目の前の現実を受け入れたくありませんよ。わかりました、もういいです。信じますから早く服を着てください。」

どうやら信じてもらえたようだ。言葉が投げ遣りだつた気がしないでもないが、信じてもらえたことにしよう。とりあえず服を着る。

「そういえば、先ほど火車と仰いましたね。ということは妖怪には会えたのですね。」

「うむ。見てくれば完全に人間であつたが、間違いなくあれは火車であった。それも子持ちの火車であった。さつそく妖怪図鑑の執筆に取り掛かるうと思つ。」

「お待ちください。」

なぜ止める。そう思つて狐の顔を見ると、なにやら偉そうな、どこかやりきつたような顔をしている。頬を引っ張つてやりたい。

「何だ。服ならもう着たぞ。」

「その話はもうやめてください。次はありませんよ。図鑑の執筆を始める前に夕食にしましょう。私が作ったのですよ。私が。」

確かに、キッチンでは鍋から何やらが煮える音がする。家事をしろといったのは半ば冗談であつたのだが、まさか本当にするとほんかなか将来有望な狐である。

「ふむ、では先に夕食を頂くとしよう。ちなみに何を作ったのだ。『油揚げの味噌汁』でござります。」

得意げな顔。少し間を置くことにする。このとき私は、狐が夕食のメニューの続きを言つたと期待していた。期待は打ち碎かれた。

「どうしたのですか。鳩が鉛鉄砲を喰らつたような顔をしておいでですよ。」

「おそらくその鳩の頭は吹き飛んでいるだろうから、私がどのような表情をしてくるのか皆目わからん。それより、夕食は味噌汁以外にないのか。」

「はあ、『ございませんが。』

「その心底訳が分からぬ、と言いたげな表情をやめる。夕食を作ってくれたことはうれしいが、さすがに味噌汁だけでは不味いと気付いてくれ。」

まあ、人と人以外との間では常識も違う。今回は家事を教えてお

かなかつた私が悪い。

「わかつた。家事は今後きつちりと教え込むこととじよつ。とりあえず味噌汁だけでも食うから、持つててくれ。」

「かしこまりました。」

狐が碗に味噌汁をよそう。台所に立つその姿は中々様になつており、不覚にも見とれてしまつた。

「どうぞお召し上がりくださいな。」

「ああ、ありがとうございます。」

味噌汁の出来栄えを見る。恐ろしく透明度の高い液体の上に油揚げが浮かんでいる。ここまで透明な味噌汁は見たことがない。とうより味噌汁ではない。ただの湯に油揚げを浮かべたものである。

「貴君、さつまき今日の夕食は味噌汁であるといつたな。まず味噌汁とは何か、答えてみよ。」

「はい、味噌汁とは熱い液体に好きな具材を叩きこんで、煮たものです。」

「ちなみにそれは誰から聞いたのだ。」

「堀田様、という方です。佐野様の御学友であると仰つておられました。昼頃訪ねていらして、右も左もわからず、困っていた私を手助けしてくださいさつたのです。買い物の仕方も教えていただきました。」

「

奴か。道理で味噌汁の作り方に悪意が見え隠れするはずだ。

「今後は私がいないときに誰か来ても、扉を開けないようだ。堀田が来たら酷く化かしてから追い返すこと。味噌汁には味噌を入れる

「」と。わかつたな。」

「あの、味付けが不味かったのでしょうか。堀田様から『愛情こそが最高の味付けになると』聞いたので、油揚げに対する愛情を、溢れんばかりに詰め込んだのですが。」

私に対する愛情ではないのか。油揚げへの愛情が詰まつた湯を食し、私はどういった反応を示せばよいのだろう。

「申し訳ありません。私は家事も満足にできぬ駄目な狐でございます。こんな残飯は即刻処理いたします。」

「待て、食わぬとは言つていない。むしろ食べさせてくれ。文句ばかり言つてしまなかつた。」

そんなに落ち込んだ顔をされでは食わざるを得ない。それに、せつかく作ってくれたのだ。何より下宿を始めてから誰かが飯を作つて待つてくれているなどといつことはなかつた。心底うれしくはあるのだ。

「わかりました。それでは口を開けてください。」

「待て、何をしようとしている。」

何故か狐が箸で油揚げをつまみ、私の眼前へと持つてくる。

「先ほど食べさせてくれ、と言つたではないですか。まあ、早く口を開くのです。」

「そういう意味で言つたのではない。ちゃんと自分で食つ。」

狐から箸を奪い取り、油揚げをかきこむ。特に味はしなかつたが、暖かかった。

「御馳走様。時に、貴君は食べないのか。油揚げは好物なのだろう。」

「私は既に何匹か食べておりますから。満腹なのです。それに、佐野様のお金で買ったものを、私が食すわけにはいきません。」

「律儀なやつだな。しかし、同居人がいるというのに食卓を囲めないというのは少々寂しいものがあるぞ。」

「では、食卓で鼠を食べてもよろしいのですか。生で。」

想像してみる。食卓の上で開催される鼠の解体ショー。確かに、食事をしながら眺めたい光景ではない。

「そうだな、食卓を囲むのはあきらめよう。だが、生活に支障のない範囲ならば菓子のような嗜好品を買ってもよいのだぞ。」

「有難いお言葉です。では、今後はほんの少しだけ甘えさせていただきます。」

「つむ、我慢しすぎるのはよくないからな。」

夕食後、狐は慣れぬことばかりで疲れてしまったのか。眠つてしまつた。そつと布団をかけてやる。ひと段落ついたので、妖怪図鑑の執筆に取り掛かる。

現代妖怪図鑑 項目ノ一 火車

現代における火車は、人に化けて靈柩車の運転手をしている。葬儀業者から派遣されたものだと思って安心して棺桶を預けると死体がさらわれてしまうので、靈柩車に棺桶を乗せる前に必ず運転手が火車か否かを確認すべし。注意点として、決して火車の駆る靈柩車の助手席には乗らないこと。代わりに灼熱地獄に放り込まれることになる。しばしば妻子持ちの場合がある。

「なあ貴君、貴君は妖怪であらう。」

近くを通った人が心底憐れんだ眼を私に向け、関わらないようになると足早に去つていった。

しかし私は一切省みない。なぜなら私は人々を妖怪たちの魔手から救い出すという重大な使命を担つてゐるからだ。ついでに印税も入ればなおよい。

水無月。私は例のごとく、図鑑のネタを探して町をさまよい続けていた。ここ一ヶ月ほどで、我が妖怪図鑑の項目はそれなりに増えた。基本的に三日坊主である私がこれほどまでに一つのことに集中するとは、喜ばしい進歩である。進歩と言えば、我が家家の家事手伝いのことも報告しておこうと思つ。

当初は味噌汁に味噌を入れないといった暴挙を行つた彼女であったが、頭脳派を自称するだけあって私が家事を教えると、スponジのごとくその知識を吸収していった。近頃では創作料理を作りだすほどである。きっとその頭をしぼれば知識があふれ出してくることだろう。

さて、妖怪探しである。ここ一ヶ月でわかつたことは、どうも狐と出会つてから私の頭には妖怪アンテナがついたらしい、ということだ。近くに妖怪がいれば、その気配から感知できるようになったのだ。おかげでネタを探す分には、すこぶる便利である。

その妖怪アンテナが、近く建設中のビルの付近を通過した時に反応した。危険な妖怪でないことを祈りながら、そつと目を向ける。

それはビルとビルの間にある脇道に、ぽつんと佇む看板であった。

危険！通行禁止、といった文句とともに、工事作業員がこちらに向けて手を広げている絵が描かれている。完膚なきまでに、看板である。

私は自身が看板に話しかけるほどに、話し相手に飢えている寂しいやつではないと自負している。しかし、今までに妖怪アンテナが誤作動を起こしたことなどないことを考えると、一応話しかけてみるべきなのだろう。

冒頭に戻る。

「いいや、断じて違う。」

喋りやがった。人型と看板との初のコミュニケーションが行われた瞬間である。一体どこから声を出しているのだろうか。思わず隠されたマイクやテープレコーダーがないか、足元を探す。特に何もなかつた。

「おいお前、話しかけておいて、何故下を見ているのだ。人と話すときは目を見て話せ。」

看板に注意された。これも恐らく世界初だろう。しかし今こいつ自分のことを人と言わなかつたか。それに目を見て話せと言われても、どこが目であるのかわからない。とりあえず、描かれた作業員の目を見ながら会話を続ける。

「失礼した。実は私は近くに妖怪がいればわかる、という力を持っているのだが、それが貴君に反応したのだ。貴君が妖怪でないというのなら、後学のためにも貴君がなんであるか教えてくれないだろうか。」

「俺が何者か聞く前に、お前が名乗れ。最低限の礼儀だぞ。それに、妖怪など見つけてどうするつもりなのだ。」

看板が声を荒げる。外見上変化はないが、どうやら怒っているらしい。どうやらかなり礼儀正しい看板のようだ。素直に謝つておくべきだ。

「重ねて失礼した。私は佐野征十郎という。妖怪を探しているのは、私が現代妖怪図鑑を執筆しているからだ。」

「また妙なものを作っているのだな。だが残念ながら、俺は妖怪などではなく、ただの塗り壁だ。」

「さういふと自分の正体をいう看板もとい塗り壁。そして私の脳みそが確かなら、塗り壁は妖怪のはずである。それも割と有名な。」

塗り壁は通行人の行く先に立ちはだかると謂われる妖怪である。堀に挟まれた小道を一人で行くと、真っすぐな道であったはずなのに曲がり角が現れ、その曲がり角を曲がってみるとまた新たな曲がり角が現れる。不審に思つて壁を調べてみると、塗り壁であつた、という逸話が残つている。

「塗り壁は妖怪であると思うのだが。」

「塗り壁は塗り壁だらう。何を言つてこらのだ。」

頭が痛くなつてきた。この塗り壁どうやら頭があまりよくないらしい。あるのかは知らないが、こいつの脳みそはきっと皺のない、卵のような脳みそだらう。もつ面倒だから、塗り壁は妖怪か、とう話は置いておこう。

「塗り壁とは、その名の通り壁のよつた姿をしていると思つたが、何故貴君はそのよつた看板のよつた姿をしているのか教えてくれないか。」

「よくぞ聞いてくれた。この姿は俺たちが考えに考えた先に見出した、究極の形なのだ。」

何やら大げさな前振りとともに、喜々としてその姿に至った経緯を話しだす塗り壁。どうやら長い話になりそうだ。私は質問したことと後悔した。

「お前は俺たちが道を塞ぐとき、ただ道の真ん中で突っ立っているだけでよいと考えているかもしれないが、それは大きな間違いだ。人間に正体を看破されぬように、周りの壁の高さに合わせて背を伸ばしたり、周りの壁の模様と自分の体の模様を同じにしたり、広い道を塞ぐために体を横に伸ばしたりといった細かい技術が要求されるのだ。これがなかなかに辛い。そこで俺たちが考えたことは、どうにかして塀に化ける労力を減らすことができないか、ということだ。そこからは試行錯誤の日々だ。」

塗り壁の話し方に熱が入ってきた。対する私は冷めている。もし私と塗り壁が窓ガラスがあつたとしたら、あまりの温度差に結露することだろう。

「多くの塗り壁が、新しい方法を試しては散つて行った。俺たちはそれでもあきらめなかつた。あえて道を塞がないでみたこともあつた。どうか通らないでくださいと人にお願いしたこと也有つた。そして五百年の時を経て、俺たちは最善を見つけたのだ。」

暑苦しい。六月の蒸し暑さも相まって、塗り壁の話が終わる前に私の脳みそのほうが先にとろけてしまいそうだ。そうなれば世界の損失である。早く話し终われ。

「昔と比べて随分様変わりした世の中で、俺たちは現代人が色々な

ルールの下に生活していることに目を付けた。そして考えたことは、通つてはならないというルールを人間に課すものに化けたことであつた。これならば、あらかじめ一つのものに化けておけば、後は細かい調節をせずともいつでもどこでも道を塞ぐことができる。そしてついに俺たちがたどり着いた結論は、工事現場の通行禁止の看板だったというわけだ。」

ようやく話が終わつたらしい。かれこれ三十分、私は看板に一方的に話しかけられ続けていた。よく考えたら、何故私はこいつの話を律儀に、最後まで聞いてしまつたのだろう。貴重な時間を溝に投げ捨てた私の気持ち、推して知るべし。

内心イララしていた私は、この看板にいやがらせをすることにした。

「どうだ、俺たちがこの姿にたどり着いた理由、よくわかつただろう。素晴らしい考え方だと思わないか。」

「ああ、確かに一見その姿は完璧に思えるな。だが、その姿には致命的な弱点がある。」

「なんだと、俺たちの五百年を侮辱するつもりか。この姿は完璧だ。弱点があるところのなら言つてみろ。」

言葉で伝える代わりに、おもむろに私は塗り壁の横を通り過ぎようとする。

「おい、何をしていい、まさかこの道を通るつもりなのか。ここは通行禁止なんだぞ。危ないんだぞ。」

「それは貴君が勝手に決めしたことなのだらう。私の家はこちらから帰ると近いのだ。その姿の弱点は、正体がばれてしまつたら最後、人の通行を防ぐ術はないことだ。なぜなら貴君は看板だからだ。昔のように、道いっぱいに体を広げて塞いでいれば、正体がばれても

通行を防ぐことはできただろうな。」「よせ、この道は本当に危険なんだ。」

騙されるものか。私は一ヤリと笑って看板の横をすりぬけた。いい気分だ、一杯くわせることができた。楽して道を塞いだとした報いである。

「危ない、避ける。」

私がビルの隣の脇道を歩きだすと、唐突に上から大きな声が降ってきた。

反射的に上を向くと、建設中のビルからちょうど私の頭上に向けて巨大な鉄骨が落下してくるのが見えた。道幅的に、避けることは叶わないようだ。

私に鉄骨が直撃する寸前、「忠告はしたぞ」という声がした気がした。

「おかえりなさいませ、佐野様」

玄関の開く音が聞こえたのだろう。同居狐の家事手伝いがなぜかうれしそうな声で私を迎える。そんなに私の帰りが待ち遠しかったのか。

「ああ、ただいま。どうした、皿が皿のようになつていいるぞ。」

「どうしたと聞きたいのはこちらです。服が血塗れではないですか。お怪我はないのですか、自殺未遂ですか、それとも誰かぶち殺したのですか。逃亡されますか、自首なさいますか。私は罪を償つべきだと思いますが、逃げるというのならお手伝いしますよ。」

「落ち着け、動転しすぎだ。貴君はどうも刑事事件に持つていきたがるな。これは自殺でも殺人でもなく、ただの事故だ。」

「なるほど、事故に見せかけるんだね。それなら僕も協力しよう。ああ、興奮してきた、まるでミステリー小説の世界じゃないか。さあ佐野、早く現場に案内してくれよ。一体誰を殺めてしまったんだい。」

狐と私しかいないはずの部屋で第三者の声がした。それも随分とふざけたことを言つている。部屋の隅に目を向けると、幸運を運んでこなさそうな座敷童子が一ニヤニヤと笑っていた。

「大変だ、狐。私の妖怪アンテナが狂つてしまつた。座敷童子がいるといつのに全く反応しない。このままでは図鑑の作成に支障がでるわ。」

「酷い言い草だな、僕は人間だよ。それにそんな口を聞いていいのかな。もう君の出席回数を誤魔化すの、やめちゃおうかな。」

「悪かった、冗談だ。しかし何故そんな隅っこにいるのだ、堀田。」「いや、彼女に常に自分とは限界まで距離をおくよつこ、と言つてけられてしまつてね。」

「貴君一体何をしたのだ。」「少しじスキンシップをとらうとしたんだが、嫌われてしまつたようだ。」

「こいつは私の通う大学の同じ学部に所属している友人で、堀田といつ。身長が低く、童顔であるため、しばしば座敷童子であると勘違つたことがあるが、その正体は齡二十歳の人間である。しかし、こいつは女と見れば誰彼構わず手を出すような奴ではなかつたはずだ。それに、一人は春に一度会つてゐる。そのときは狐も、特別堀田を嫌つてゐる様子を見せていなかつたが。

「ところで佐野、君は罪を犯したね。」「何を言ひ、私は生まれてこの方、罪を犯したことなどないぞ。」

まさかどこぞの一神教みたいに、原罪がどつのかの言ひだすわけでもあるまい。

「いいや、君は大きな罪を犯した。僕に彼女のことを黙つていたことだ。」

「それについては説明しただろう。彼女は私の従妹で、彼女の両親がエロマンガ島に行つたきり行方不明だから、私がしばらく預かつてゐるのだと。」

「あれは冗談ではなく、本氣で誤魔化そうとしていたのか。僕は今その事実に驚いてゐるよ。来世はもう少しともな脳みそを搭載するべきだね。」

そこまで言つた。まあ自分でも苦しい嘘だとわかつてはいたが。

だがここに、本当は狐です、などと呟ひ覗ひはない。

「なぜ彼女が妖怪であることを黙つていたんだい。」

「おじ狐、どうこうことだ。」

思わず平生の口調を崩してしまった。なぜ堀田にばれていっているのだ。私は狐の顔を恨めしげに睨む。対して狐は困惑した顔をしていた。

「いえ、佐野様が以前に再び堀田様が来たら化かして追い返せ、と仰っていたので、その通りにしようとしたのですが。」

堀田を、化かすだと。私は本当にそんな指示をしたのか。だとすれば私は底無の阿呆だ。

「私なりの恐ろしい姿に化けて出迎え、追い返そうとしたところ、堀田様が急に私に抱きついてきたのです。目が血走っていて、私の姿より恐ろしかったです。」

「そうなることはわかりきつているのに。何を隠そ、堀田は生糸の妖怪好きなのだ。その妖怪への愛は留まるところを知らず、偏執的とすら言えるレベルにまで達している。何しろ、私と初めて会つたときに吐いた言葉が、「君はでいだらぼっちなのかい。もしそうなら僕と友達にならないか。」である。

高すぎる上背を気にしていた私は、いたく傷ついたものだ。

「驚いたよ、まさか君が妖怪と同棲しているだなんて。どうして教えてくれなかつたんだ。君は僕が妖怪に遭いたがつてていることを知つているだろ?」

「ああ、顔を会わせるたびに似たようなことを聞かされれば、どんな奴でも頭の中に刷り込まれてしまうだろうな。もう少し頻度を下

「してくれ。」

「だつたらどう教えてくれなかつたの。返答によつては訴訟も辞さないよ。」

「どういった内容で訴えるつもりだ。教えなかつた理由は単純だ。教えたが最後、貴君は我が家に毎日のように入り浸るようになるだろうからだ。」

「そ、そんなことない、よ。」

田が泳いでいる。じじまであからさまな演技をするところとせ、肯定と捉えていいだろ？

「まあ、ばれてしまつた以上は仕方がない。つちに来るのは構わないが、騒がしくしないこと、多少は田を空けること、手土産を持つてくること。この三つは守つてもらひついだ。」

「待つて下さい、佐野様。もし佐野様がいないときには、堀田様が來たら私はどうなるのですか。見てください、あの眼鏡の奥の血走つた眼を。性犯罪者と同じ田をしています。」

狐が会話に割り込んでくる。自分の身の安全がかかっているので必死だ。

「安心しろ、狐。堀田は変態であるが紳士だ。乱暴はしないはずだ。乱暴は。」

「佐野の言つ通りだよ、狐さん。僕は色々と質問させてもらいたいだけだよ。色々とね。」

「不安すぢます。安心できる要素がありません。」

狐が涙田になつたので、堀田にぐれぐれも狐に対して不快な真似はしないよう言い聞かせておいた。これで大丈夫だろ？ たぶん、おそらく、きっと。

「さて、今日のところは帰るよ。僕は君と違つて真面目な学生だから、時間がいくらあってもたりないほどに忙しいんだ。またね、狐さん。今度は一人きりで、じっくりと話そづ。じっくりと。」

「ああ、早く帰るがいい。また来る時は手土産を忘れるなよ。」

「一度と来ないでください。お願ひ致します。」

狐が切実な言い終える前に、堀田は玄関の扉をさつと閉めてしまつた。狐は小刻みに震えている。チワワかお前は。

「といひで佐野様、あのまま帰してもよかつたのですか。」

狐が不意に真面目な顔になる。どういう意味だろ？。

「何だ、無事に帰すのは納得がいかないとでも言いたいのか。あいつは変態であるが、死なねばならないほど重度のものではないぞ。」「いやそうではなく、怪異と認識した上で私と遭つたということは、あの方も今後は多くの怪異に見舞われることになりますよ。」

なんだ、そんなことか。

「見ただろう。あいつは妖怪フェチなのだ。怪異に見舞われるようになつたなどと、やつが知つたら小躍りするだらうな。」

「そんなものですか。確かにあの方の愛情が向けられれば、いかに強力な怪異でも吐き気を催して逃げ出しそうですが。」

「貴君、本当にやつのことが嫌いなのだな。」

現代妖怪図鑑 項目ノ三十一 塗り壁

塗り壁といえば人の行く手を塞ぐ妖怪として有名であるが、現代の

塗り壁は変化するための労力を極限にまで減らした結果、工事現場の看板と化していた。本物の看板と差異がないため、外見上は見分けることは難しいが、声をかけると返事をするため、偽物を判別するのは容易である。ただしなぜ看板になつたかを問うと長話を始めるので、全て聞いてやろうとすると結果的に足を止められることになる。なお、なんらかの忠告をされたら素直に聞くべし。

「なあ貴君、貴君は妖怪であろう。」

親と思われる女性に手を引かれた子供が私を指さし、「あれなにー。」と心ない言葉を放つ。女性は子供の目を手でふさぎ、足早に立ち去つて行つた。しかし私は断固として自分の行いを改めるつもりはない。なぜなら私には、印税を得て自らの将来を確かなものにするという目標があるからだ。ついでに人々を救うことができればなおよい。

神無月。私は例によつて例のごとく、図鑑のネタを探すべく町をふらついていた。現代妖怪図鑑は着実に完成に近付いている。その項目の数は、あと少しで百鬼夜行を行えるほどになつていた。順風満帆である。

近況を報告しようと思つ。あれから堀田は毎週一回の頻度で我が家を訪れているらしい。

らしい、といつのも堀田は大抵私が不在のときに限つて我が家を訪れるからだ。私が自宅で堀田に会つたのは、寒質月に一度程度である。

狐曰く、「あれは絶対に、佐野様が出て行くのをどこかから確認していますよ。」のことだ。ちなみに今のところは、狐に被害らしい被害はない。せいぜい気味の悪い目つきで見つめてくる程度らしい。どちらが妖怪だかわかつたものではない。

なお、諸兄らの中に私の単位の心配をしてくれている物好きがいるかもしないので、一応報告しておく。試験前に行つた連日連夜のデスマーチにより、私は必修講義の全ての単位を取得することができた。この期間でまたいくつか堀田に貸しを作つてしまつたが、

やつが要求する見返りなど大体予想がつく。狐がまた涙目になる様子が目に浮かぶ。

さて、雑談はこの程度にする。今回妖怪アンテナが反応した場所は水族館である。今日は休日であるためか、親子連れの多いことが見て取れる。こんなところで妖怪が暴れだせば大惨事間違いなしだ。私は自身が、民衆を守る英雄になつた気分がしたので、意氣揚々と胸を張り、か弱い人々を守るために水族館に乗り込んだのであつた。ちなみに入場料は大人二千円であつた。

そして冒頭の仕打ちである。しかし、真なる英雄とは人に理解されずともひたすら民衆を守るために戦い続けるもの。顔をぬぐつたのは痒かったからであつて、決して涙が流れてきたからではない。私は田の前の悪しき妖怪に向き直る。まずはこいつに、自身が妖怪であることを認めさせねばなるまい。

「ええ、その通りよ。よくわかつたわね。」「やはり認めないか。その通りだなどと、苦しい言い訳をする。」

あれ。

「貴君今、自分が妖怪であると認めなかつたか。」「だからさうだって言つてるでしょ。で、一体何の用なの。」

図鑑の完成間近にして、新しいパターン。初っ端から認めてきたのは、こいつが初めてである。これは中々手ごわいかもしれない。

「要件の前に聞きたいためだが、そんなに簡単に認めてよいのか。今日は客もたくさん来ていることだし、正体がばれると貴君の立場が危ないのでないのか。」

「なんだ、そんなこと。周りを見て『いらっしゃい。私が堂々としている理由がわかるわよ。』

そういえば先ほどから何か違和感があった。物音ひとつ、しない。あれほどたくさんの人人がいたというのに。周りを見渡す。先ほどまで人で満たされていたはずの空間は、完全に無人と化していた。巨大な水槽に囲まれた空間に一人というのは、なかなか不気味なものである。

「人払いの結界を張ったの。人魚にとつては必須の術よ。本来ならあなたもこの空間から弾かれるはずだったのだけど、あなたは何か妖力に対しても耐性のようなものを持っているのかしら。」

さらりと正体を言う。姿からして予想はしていたが、やはり実際にこれが人魚であるとわかると絶望感が凄い。私は目の前でつくりとした体をしたジュゴンを眺め、深く息を吐いた。金髪ブロンドや貝殻のブラジャーといった幻想は、今碎かれた。

「どうしたの、ため息なんかついて。私の体はため息が出るほどに悩ましいのかしら。」

「ああ、うん、そうだね。」

その体型に欲情するのはドラマ缶フェチくらいだろう、と言いたかつたが、さすがに女性に対して失礼であるので自重した。男子諸君、紳士たれ。

「そろそろあなたの用件を教えてくれない。結界を維持するのは割と疲れるの。」

「ああ、すまない。私は佐野征十郎という。貴君に声をかけたのは、私が今作成している妖怪図鑑に貴君のことを載せたいからだ。協力

してくれないか。」

ジユゴンは顔の前面にある鼻だか唇だかわからん部位をひくつかせ、私をじつと見つめてくる。どうやら悩んでいるようだ。白い尾が水槽をピタピタと打つ。

ジユゴンは三分ほど黙考した後、口を開いた。

「わかりました、協力はします。でもひとつ条件があるの。」

「ありがたい。して、その条件とはなんだ。」

「あなたが知りたいことを全部聞いたたら、帰る前に私の自慢の歌を聞いてほしいの。」

「それは願つてもない。一ちらから頬もうと思つていたくらいだ。人魚の歌声は、この世のものとは思えないほどに美しいと聞くからな。」

いたつて順調に交渉は進む。存外協力的な態度に、一ちらが戸惑つているくらいだ。

「まず氣を悪くしたらすまない、と前置きをしておく。人魚の肉に不老不死の力が宿っているというのは、本当か。」

「ああ、やっぱり人が最初に聞くのはそのことね。答えましょう。私たちの肉を食べると不老不死になれるのは本当。あなたも食べてみたいのかしら。」

「いいや、間に合っているよ。」

「賢明な判断ね。不老不死とはいっても、それは人間の考えているような都合のいいことじゃないの。あくまで死なないだけ。例えば、不治の病にかかるたとしましょう。普通の人間は、いたつて普通に死ぬでしょうね。けれど不老不死になつたものはそうはないかない。明らかに人間であれば死ぬ段階まで病気が進行しても、決して死ぬことはない。常人ならば死んでいるであろう苦しみを、永遠に味わ

い続けなければならない。人魚の肉を食べたいと言うものは、よほどの自信家なのでしょうね。永遠に自分が健康体でいられるとでも思っているのかしら。たかが百年も満足に生きられないくせに。」

ジュゴンの眼差しはどこか遠くを見つめていた。人間の欲望のために狩られていった仲間たちと、その肉を食つた者たちの末路に思いを馳せているのだろうか。

「では次に、なぜ貴君がここにいるのかを聞きたいと思う。人魚として捕まつたわけではないのだろう。もしそうだとしたら、人間が貴君を放つておくはずはないからな。」

「ええ、私はジュゴンとしてここにきました。それもわざと捕まつてね。」

「わざと。それはまた、何故。」

「疲れちゃつたの。この科学信仰がはびこる時世でも、いまだに人魚の肉を求めている者たちはいる。結界を張つておけば、そういう連中が近寄つてくることはないけど、寝ている間は張り続けることはできないし、起きている間も四六時中結界を維持していたら、気の休まる時がない。それならば、いつそ人間社会の中に自ら飛び込めばいいと思つたの。肉を求めている連中は、人魚に対して妙に神秘的なイメージを抱いているから、まさか自分たちの求めている存在が水族館で見世物になつているだなんて、想像もしないでしょう。ここは人間の集まる場所だけど、私たちにとつては安住の地よ。」

「

人魚が語り終える。私は彼女に対して、何の言葉も返すことができなかつた。

彼女の言葉があまりに強がりに満ちていたから。この場所が安住の地と彼女は言つたが、そんなはずはない。いかに危険とはいえ、誰が望んで住み慣れた母なる大海から、こんな水槽の中へと來たが

るだろうか。恐らく彼女は、自分の意思でここに来たのではない。先ほどの話も、自分を納得させるためのものなのだろう。それに、彼女自身気付いているはずだ。自分が一般的なジュゴンよりも寿命が圧倒的に長いことを。人間がそのことに気づくのはそう遠くない未来だろう。その時彼女は。

「質問の時間は終わつたよ。そろそろ私の自慢の歌を聞いていただけるかしら。」

「ああ、ぜひ歌つてくれ。」

静謐な空間に歌声が響く。その旋律は目の前のジュゴンが歌つているとは思えないほどに美しく、流麗で、そして悲しかった。歌の内容がどのようなものなのかは、恐らく人間が理解できるものではない。ただ、望郷の歌である、ということはなんとなくわかった。

歌が止む。

「感想、聞かせていただけ。」

「がぼがぼがぼ。」

「ありがとう、そう言つてくれると嬉しいわ。」

「がぼがぼがぼぼ。」

「どこつて、水槽の中だけれど。」

「がぼがぼ。」

「私は歌つていただけ。あなたが勝手に入ってきたのよ。」

忘れていた。人魚の歌。数多の男を惑わす、幻惑の旋律。

「ごめんなさい、あなたに恨みはないけれど、私はもう少しだけ生きていきたいの。そのためには私の正体を知っているあなたが生きていると、不味いでしょう。」

必死に水を搔いて、水面を手指す。その私の足に真っ白な腕が絡んできた。

「いかないで、ここで一緒に歌いましょう。」

幻想であつたはずの金髪ブロンドが、そこにいた。

「おかえりなれこませ、佐野様」

出迎えの言葉をかける狐はなぜか狐の面を被つている。

「どうしたのだ、面など被つて。何か妖怪らしこどもやらかす気か。」

「それならもうしましたよ。」

狐はそう言つて私の足元を指さす。足元を見やると堀田が木の葉にまみれて倒れていた。

ついに殺されたかと思つたが、薄氣味悪い笑い声をあげているのでどうやら生きているようだ。足の先でつついてみる。

「ふふふふふ、佐野、見てくれよこの様を。妖怪に、それも妖術を使われて襲われてしまつた。」

「ああ、災難だつたな。自業自得なのだろうが。」

「幸せすぎる。僕もう二つ死んでもいいや。」

「ただでさえ変態の上に、マジヒストなのか。」

堀田の知りたくない一面をまたひとつ知つてしまつた。こいつはもう救いようがない。こんなやつと友人であると近所の住民に知られれば、私まで同類扱いされてしまつ。わざとお歸り願おう。

「堀田、今日の私は狐どんぐりをするので忙しい。悪いが今日のところは帰つてくれんか。」

「つひやましいな、ちくしょう。まあ待つてくれよ、今日は狐さんじゃなくて君に用があつて来たんだよ。」

「聞く義理はない。帰れ。」

「僕が試験勉強を手伝わなければ、君は今頃留年確定だつたるうね。」

「

それを言われると弱い。どうせ堀田の頼みなどないことにのだらうが、聞くだけ聞いておくとしよう。」

「何だ、狐ならばやらんぞ。こいつはうちの大事な家事手伝いだ。「さすがにそんなことは言わないよ。前にちょっと、この紙にサンをして欲しいだけや。」

そういつて堀田は一枚のA4用紙を差し出してきた。名前を書く欄がいくつか並んでいる。

「創部届。貴君、何か部活を作るのか。」

「ああ、表面上は歴史民俗研究部、といふ部だ。」

堀田は表面上は、といふ部分を強調して言った。少なくとも歴史民俗を研究する部ではなさそうだ。

「表面上とはどういうことだ。」

「部つていうのはサークルと違つて、そう簡単に作れるわけではないのだよ。表面上だけでも真面目な目標を持つていて」とアピールしなければ、中々受理されないんだ。」

「ならばサークルで良いではないか。それに私が聞いているのは、その部を作つて何をするつもりなのか、ということだ。」

「部でなければ部費が出ないんだ。目的についてはこれから説明するよ。君も部員になるんだからよく聞いておいてくれ。」

まだ入部するとは言つていない、といふ意見はきっと聞きけら

「そんなに嫌そうな顔するなよ。君にメリットがないわけじゃない。

我が部の目的は、全国を巡って妖怪を探すことなんだ。君は妖怪図鑑を作るためのネタが手に入る、僕は全国の妖怪へ愛を伝えることができる。どうだい、入部してみないか。」

確かに、悪い話ではない。妖怪図鑑は百鬼分の情報が揃つたら、一旦完成とする予定であったが、もし間違つて売れてしまつたら第一版のオファーが来るかもしれない。そのときのために妖怪の情報を集めておくのも悪くない。

「いいだろう、入部はしてやる。しかし部活を作るにも人数がいるのではないか。私に堀田、他に誰か当てはあるのか。」

「まあその辺は適当に見つけておくよ。君はそれにサインをしてくればそれでいい。」

どうもこいつ何か隠している気がする。どうせ聞いたところで教えてくれないだろうから、深くは追求しないが。

「ほら、これでよいのか。」

「うん、ありがとう。助かるよ。」

私は創部届にサインをし、堀田に手渡す。堀田は無駄に爽やかな笑みを浮かべて受け取つたが、なぜか用紙を見てその笑顔が凍りついた。

「どうした、何か不備でもあつたのか。」

「いや、初めて佐野の書いた字をまじまじと見たんだけど。」

字がびついたのだろうか。堀田は渋い顔で用紙を見つめている。

「君つて字が恐ろしく汚いね。」

あ、今わりと深く心に来た。

「な、何を言つてゐるのだ。私の書いた字が汚いはずがないだろ?」

「いや、これは酷いよ。汚いといつよりもむしろ怖い。文字を見て怖いという感想を抱いたのは、生まれて初めてだよ。行書とか草書とかが比にならないレベルで、字が崩れている。」

「そんな馬鹿な。狐、見てくれ。私の字は汚くなんかないよな、な。

「うわあ。」

よつと深く傷ついた。狐の本氣で引いた顔を始めて見てしまつた。

「Jの三角形の鉛筆をあげるから元氣だしなよ。」

堀田が持ち方の練習をするための鉛筆を差し出す。なんでそんなものを持ち歩いてこらのだ。とりあえず奪つて折つておいた。

「まあ、今のは冗談だとしても、字の練習はしておいて損はないと思つよ。それじゃ、僕は部員探しを始めるから一旦帰るよ。君もたまには大学に来なよ。」

「余計なお世話だ。字の練習だけは考えておいてやる。」

騒がしい奴がようやく帰つた。やつとへつべじことができる、と思つたところで狐が声をかけてきた。

「佐野様、実は佐野様がお帰りになつてからずっとと氣になつていたのですが、なんだかえらく濡れていませんか。」

くしゅん。指摘された瞬間にくしゃみが出た。そういうえば全身がびしょ濡れであつたのだ。風邪をひかぬうちに着替えねば。

「もう、仕方ないですね、いい歳して水遊びでもなさつたのですか。洗濯しますから服を貸して下さい。」

「ああ、すまないな。頼んだ。」

狐は私の服を受け取ると、てきぱきと洗濯機を回し始めた。もう一通りの家事はすっかり覚えており、私よりも上手にこなすくらいになっている。狐の姿勢は幼いはずなのに、その姿は幼少のころに見た母に重なつた。

「なあ狐、貴君に家族はいたのか。」

思わず問うていた。私がそんな質問をするのが意外だつたのか、狐は少し驚いた顔を見せた。

「どうしました、藪から棒に。私の家族なら、両親と姉が一人、妹が一人いました。独り立ちしてからは、ずっと会つていませんが。」「そうか、それなりに大家族だつたのだな。家族仲はよかつたのか。」

「

狐が眉根に皺を寄せ、私に疑わしげな視線を向ける。

「まさか、家族の元へ帰れなどといつもりではありませんよね。言つておきますが、まだ恩返しは済んでおりませんし、今家族がどこにいるのかもわかりませんよ。」

「いや、やつこつ意味でなく、純粋な興味だ。教えてくれないか。」

狐はしばらく私に疑わしげな視線を向けた後、よつやく納得したのか、頬に手を当てて考え始める。

「うーん、そうですね。悪くはありませんでしたが、特別いいというわけでもなし。一般的な人間の家庭を想像していただければ、そろ大差ないと思いますよ。餌を取つて来てくれたり、夜が恐ろしくて眠れない日は寄り添つて眠つてくれたり。餌を取る訓練をするとときは、随分厳しかったものですが。一匹仕留めるまで帰つてくるなど言われたり。」

狐の口から語られる、家族に関するエピソード。それを聞いている私の胸中に渦巻いているのは、羨望と嫉妬であった。

「こんなところですかね、面白くもない話だったでしょう。佐野様。」

狐に呼びかけられて、我に帰る。どうやら平生の思考を失つていたようだ。気をつけなければなるまい。

「あ、ああ、すまなかつたな、妙なことを聞いて。貴君は幼いころから、お転婆だつたらしい。」

「失礼ですね。私は小さなころからずっと淑女でしたよ。」

私の感想がお気に召さなかつたのか、唇をとがらせてすねてみせる狐。だが、その顔はやがて悪戯を思いついた子供のような顔に変化する。嫌な予感がする。

「ね、佐野様の「家族のことも聞かせて下さこよ。」

やはりそうくるか。だが今の私に、そのことについて話す覚悟はない。私の家族のことについて話すといつことは、必然的に私にとって話すことになるから。

「すまないが、今は勘弁してくれないか。」

「そんな、ずるいですよ。私ばかり話して佐野様が話さないだなんて。」

「頼む。」

狐がきょとんとした顔で私を見る。私が真剣に拒否していることに気づいたらしい。

狐はしばらく追求するか否か悩んでいたようだったが、結局押し黙った。

「すまない、いつか必ず話す。だから今は、まだ。」

私の覚悟が決まる日まで。

現代妖怪図鑑 項目ノハ十四 人魚

人魚とは人間の上半身に魚の下半身を持つ妖怪で、その肉に不老不死の力が宿っていることで有名である。しかし、現代の人魚の外見は完全にジゴンそのものであり、その肉からも不老不死の力は失われているようだ。もはや人魚を探すことにメリットはないが、男を海中へと誘う美しい歌声は健在であるようなので、自殺をする分には人魚を探すのもいい方法かもしれない。

「なあ貴君、貴君は人間であろうか。」

鏡の向こうの私は何も言わず、ただ私を見つめている。印税などいらない、世の人の役に立ちたいわけでもない。ただ、家族が欲しい。

如月。その日私は妖怪図鑑のネタを探しに行くでもなく、我が家でぐだぐだと過ごしていた。掃除機をかけている狐が、邪魔だとばかりに寝転ぶ私の背を蹴る。我が家に来てもうじき一年になるこの狐、長い期間一つ屋根の下で過ごしたことで、それなりに親交は深まつものの、それに比例してなんだか私の扱いがぞんざいになっている気がする。仮にも家主なのに。

「そう思うのでしたら、普段から威厳をお見せ下さいな。そうしていただけたら、私も尊敬のしようがあるというものです。」

「それは私が悪いのではなく、私から威厳を見いだせぬ貴君の目が悪いのだ。私の行きつけの眼科を紹介してやろうか。」

「昼間に布団から頭だけ出して寝転んでいる人間に、威厳など見出せませんよ。見いだせる方こそ、即刻眼科に行くべきです。では佐野様、急ぎましょう。」

「待て、なぜ私が行く流れになっているのだ。視力検査ならひと用ほど前にしたばかりだぞ。」

「いえ、私が連れて行こうとしているのは学び舎ですよ。期末試験が近いのでしょう。また堀田様に泣きつく羽目になる前に、計画的に勉強すべきです。」

「睡眠学習とは良いものだ。」

狐がまた私の背を蹴る。今度は先ほどよりも強めに。思わず狐を睨みつけると、狐はため息をつき、自らの両掌を肩の高さにもつて、心底呆れた、といった様子で首を左右に振った。歐米か。

「ナンセンスです。ベリーバッドですよ、佐野様。」

「ルー大柴だつたか。」

狐との会話は、楽しい。共に過ごす時間が心地よい。だからこそ、これ以上隠しているわけにはいかない。それは、狐と過ごすこの時間を嘘にしてしまうことになるから。例え、それにより、今日彼女と決別することになったとしても。また、失うことになったとしても。

「なあ狐、実は話したいことがあるのだ。」

狐は私の言葉の中に、真面目な声色を感じ取つたらしい。美しい眉をひそめ、急に態度を変えた私を訝しげに見つめる。

「どうなさつたのですか、急に。まさかもう留年が確定しているとか。そういった話なら、私に言われてもどうしようもありませんよ。」

「ああ、心配するな、その辺はどうにかする。これからするのは昔話だ。」

「昔話、ですか。」

「そう。」

私の、昔の話。

佐野清十郎。彼は極一般的で、常識的な家庭で産まれ、そして彼もまたそのようにして育てられた。

祝福されて産まれて、両親からの愛情を一身に受けて育ち、幸福

のうちに成長する。

そんな彼の人生に転機が訪れたのは、彼の祖父が世を去つてからであった。

佐野の祖父は、広大な敷地を持つ日本家屋に一人で住んでいた。祖父は明朗快活を絵に描いたような人物で、孫である佐野に甘かつた。

そんな祖父を佐野も好いていたが、その日本家屋の放つ、どこか異様な雰囲気から、祖父の家を訪ねることは嫌がつた。

祖父の死因は、あまり自然といえるものではなかつた。玄関から直進して突き当たる部屋、ちょうど屋敷の中心となる所で、自ら首を絞めるようにして死んでいたらしい。

争つた形跡もなく、家を荒された跡もない。結局警察には自殺として処理されたそうだ。

自分の首を絞めて自殺するなど、できるはずもないのに。

その日当時六歳の佐野は、両親とともに祖父の遺品の整理を行うために、祖父の家を訪れていた。

祖父の思い出の品となるものは、棺とともに焼いてしまつたため、母屋の中には冷蔵庫やテレビといった電気機器程度しか残つていなかつた。

次に両親が向かつたのは、祖父の家の一角にある古ぼけた蔵であつた。

佐野はその蔵の扉が開いたときに、何か異様な悪寒が走つたことを覚えている。

蔵の中は薄暗く、外は昼間であるのに、まるで二〇二二だけ夜が訪れたようであつた。

薄暗闇の中、両親は持参した懐中電灯を持って、入口付近から品を調べていく。そんな中、佐野の目を奪つたのは、蔵の最奥の棚に鎮座する小さな壺だつた。この蔵の中で、最奥の棚に並んでいる物など見えるべくもないのに、なぜかその壺だけは暗闇に浮かびあが

つて見えた。佐野は引き寄せられるようにして歩いた。

最奥の棚にたどり着き、壺を取り、おもむろに封を開く。中に入っているのは、どうやら液体のようだった。壺を顔に近づけ、その液体の香りを嗅ぐ。

その瞬間、佐野は正気に戻り、壺を床へと叩きつけた。

幼いながらも香りを嗅いだ時点で、本能的に理解したから。それが此岸のものではないと、人の触れてよい領域のものではないのだと。

叩きつけられた壺は割れ、中の液体は逃げるようにして床へと浸潤していった。

何かが割れる音を聞きつけた両親は、すぐに火のついたように泣きじやくる佐野のもとへと駆け寄ってきた。

しかし、両親は佐野がふざけていて壺を割つてしまい、それに驚いて泣いているのだと理解したらしく、結局佐野の感じた脅威は両親に伝わらなかつた。

「竹取物語を知っているか。竹取の翁が光る竹を切つて云々、とうやつだ。」

「かぐや姫は月に帰る前に不老不死の妙薬を、帝と翁夫婦の両方に渡したとされる。」

「帝に渡されたものは、富士の火口に捨てられたとされるが、翁夫婦に渡された薬は所在不明なのだ。」

狐は何か言いたげに口を開いたが、制止する。

「まあ待て、話を最後まで聞いてからでも遅くはない。」

その後、佐野は何事もなく七歳を迎え、小学校へと入学する。何事もなく、とはいっても佐野は自身の体に違和を感じていた。例えば今まで転べば感じていたはずの痛み。それが全くなくなつて

いた。確かにすりむいたはずなのに、実際は傷ひとつない。

佐野は子供心にそれが異常だと感じていた、それ故その違和感を決して口外しようとはしなかった。

しかし、そんな佐野の努力は、最悪の形で無駄になつた。

その日、佐野は両親とともに近所の公園を訪れていた。父親が家族サービスのつもりで連れてきたのだろう。佐野と父はキャッチボールを始める。

続けるうちに慣れてきて、簡単なボールなら確実に取れるようになる。父はそれに応じて、少し取りづらい位置に投げる。

何度か繰り返したところで、佐野はボールを取り逃す。ボールは公園を転がり出て、道路で静止した。

佐野は両親からの静止も聞かずに、ボールを拾うために道路へと向かう。

そして、道路を横切るトラックが佐野の体を吹き飛ばした。

母が悲鳴をあげる。父が絶句し、立ち尽くす。それだけ今、目の前で起こった光景が信じられなかつたから。自分たちの息子が吹き飛ばされ、人の形を成さなくなつた光景を認めたくなつたから。トラックはそのまま走り去り、両親は茫然として息子だったものを見つめる。

そして、目撃する。

肉塊がひとりでに動き、集まろうとしている。元々人であつたとわからないほどに潰れていたそれらは、早くも密着し、結合し、再び人としての体裁を成そうとしていた。

母が再び絶叫する。今度は驚愕からではなく、恐怖から。

何事もなく、当然のように無傷で立ち上がつた佐野を見る両親の目は、まるで拳銃でも突き付けられているかのように、おびえてい

た。

その日から、佐野と両親は他人となつた。口もきかず、目も合わせず、触れ合うこともない。佐野の持つ超常を受け入れるには、彼の両親はあまりに一般的で、常識的過ぎた。

ただ、両親は佐野を家から追い出そうとはしなかつた。自らの息子を家から追い出すという行為は、世間的に見ていかに非常識であるかを理解していたから。

ただ一緒に住んでいるだけ。佐野に声をかけざるを得ない時は腫れものを触るようにして。家にいるときは、自室から出ないようと言いつけられた。そこにおよそ家族の温かみと思えることは存在しなかつた。

最初から両親がこのような態度であったのなら、佐野は特に何も思うところはなかつただろう。ただ、彼は生まれてからの六年間で、両親からの愛を知つてしまつている。

その事実が彼自身を苦しめる。なぜ一人はこんなにも変わつてしまつたのだろうか、自分が何か悪いことをしたのだろうか、と。

佐野は両親が喜びそうなことは、考え付く限りすべてやつた。いい子になれば、また両親が自分に優しくしてくれる日が来るかもしれないから。

ただそれは両親からすれば、化け物が自分たちの歓心を買つて取り入ろうとしているようにしか見えなかつたようだが。

「この部屋はな、座敷牢なのだ。」

両親と、自らを隔絶するための檻。ここでの私は自由だが、本当に欲しいものは決して手に入らない。

「両親が私に対しても出した条件は、こつだ。大学には行かせてやるから、卒業したら一度と顔を見せるな。」

「別に大学に行きたかったわけではない。ただ、もう私たちが家族に戻るのは不可能だと思ったから、離別するには丁度良いきっかけだと思ったのだ。」

「私はただ徒に人生を消費し、今に至る。」

「両親を恨んでいるわけではない。誰だってまともだつた筈の自分の子供が、化け物になり変つていたら恐ろしいに決まつている。だから、恨んでは、いない。」

「私の話は以上だ。」

今までため込んでいたことを一度に話しきつた。ついでに感情も全部ぶちまけたように思う。未だ何も解決していないのに、どこか清々した気分だった。

だが、その気分は狐の顔を見た瞬間吹っ飛んだ。

狐が私を見る目が、普段とどこか違う。困惑しているような、どこか怯えているような、そんな視線。それはいつかの両親を想起させるものだった。

「それで、佐野様はそのことを話した上で、私に何を求めるのですか。」

核心。そうだ、私は隠し事があつて後ろめたいから話したわけではない。狐を怯えさせたくて話したわけでもない。私は、ただ。

「今の話を踏まえたうえで答えてくれ。」

私の不死性を、妖怪にすらあり得ないその異常を踏まえたうえで。

「狐、私の家族になつてくれないか。」

それは懇願だった。幼子が怒った親に許しを請うような、そんな

願い。

それに対する答えは沈黙。

佐野は狐の顔を見ることができなかつた。その顔が拒絶に満ちていることが予想できたから。
ああ、やはり、また駄目なのか。

「はあ。」

ようやく聞こえた声は、なぜか氣の抜けたものだつた。

何故、この場面でそんな声が出る。思わず狐の顔を見る。

その顔は、佐野がふざけたことを言つた後に見せる、いつもの呆れ顔だつた。

「阿呆だとは思つていましたが、まさかこれほどとは、さすがの私も予想していませんでした。」

「えりくもつたいぶつて話しだしたので、どんな大層な秘密があるのかと思つたら。」

辛辣な言葉を吐きながら、狐はため息をついた。

「たかが死なない程度で、どれだけ凄まじい化け物になつたつもりですか。たかがその程度の異常で、私があなたの下を去るなどと、本氣で考えていたのですか。」

「まあ確かに、妖怪の中でも死なない、というものは存在しないでしょ。それは認めます。しかし我々にだつて、腕が千切れたら生きやすくらいのことはできますし、もつと強力なやつなら、頭さえ残つていれば再生できる、なんてやつもいるのです。」

「そんな中で、不死以外は何の能力も持たないあなたを、いつたい誰が脅威だと思うでしょうか。思い上がりもいとこりですよ、この阿呆。」

狐は言いたい放題に言いきつた後、少し息をつく。勢い込んで話しそぎたのだろう。

話が途切れたところで、狐の言いたいことがまだ十分に飲み込めていなかつた私は、真意を問おうと口を開いた。が、それは狐が私に噛みつくような目線を向けたので引っ込んだ。

「黙ってください。まだ私の話は済んでいません。噛みしめて聞きなさい。」

「何より腹が立つのは、あなたと私の関係が、その程度の異分子の存在で崩れ去ると考えていたことです。」

「私はあなたに救われました。解放してもらい、妖怪であるにも関わらず、住居まで与えてもらいました。」

「それからの日々は、私にとって確かに楽しい日々だったのです。四六時中暗闇の祠の中ではなく、昼と夜の変化を感じられる部屋、昔とは随分変わった、私の知らないことばかりの世界。そして佐野様、あなたの存在。」

「そう思っていたのは、私だけだつたのですか。佐野様にとっては、その程度のことで崩れてしまう関係だったのですか。」

狐はいつの間にか、目に涙を溜めていた。その涙は美しくて、狐がたまらなく愛おしく見えた。

気付くと、私は狐の華奢な体を抱きしめていた。

「そんなことは、ない。私だつて楽しかつた。私にとって、大切だつた。」

「私は憶病だつたのだ。再び失うことを恐れ、結果貴君を傷つけてしまつた。すまなかつた、本当にすまなかつた。」

いつの間にか、私も涙を流していた。狐が私の肩を押すので、狐

の背に回していた腕をゆっくりと離す。狐は泣き笑いのよつたな顔を私に向けると、言葉を紡いだ。

「返事、まだでしたね。」

「ああ、聞かせてくれ。」

「私は今、佐野清十郎様に対する恩返しを決めました。それは、今後一生あなたの御側に仕えることです。雨の日も、風の日も、死が二人を別つとも。」

狐の紡ぐ言葉は柔らかに私の耳へと流れ込み、いつかの不安を溶解させる。

今なら過去の自分に対しても言える。何を下らないことで悩んでいるのだ、と。

「時に佐野様、一つ聞きたいことがあるのですが。」

狐は既に泣いておりず、その顔には悪戯っぽい笑みが浮かぶばかりだった。

今ならば、どのようなからかいでも受けよう。

「何だ、狐。なんなりと聞いてみよ。」

「では。」

そう言つと、狐はその場で立ち上がり、ぐるりと一回転をした。と思うと、狐の衣装はいつも浴衣から、何か見覚えのある白装束に変じていた。

「先ほど佐野様は家族になつてほしい、と仰いましたが、それは妻的なポジションでも構ないのでしょうか。」

「は。」

突然のことのために、思考が停止する私。そんな私に構わず、狐は床に指をつき、大仰な仕草で首を垂れる。

「ふつつかものですが。」

その日は昼間から晴れているにもかかわらず、雨が降った。
これは余談であるが、狐の嫁入りがある日は天氣雨が降るらしい。
あくまで余談である。

現代妖怪図鑑 項目ノ百 不死人

不死人とは、不死の妙薬や人魚の肉（項目ノ八十四参照）などを食したことにより、死から解放された元人間の総称をいう。不死になつた要因によつてその性質は異なり、場合によつては悲惨な永遠を歩むことになる。薬によつて不死人となつたものは、強力な再生能力を有しているが、その身体が再生しようとする光景はしばしばグロテスクである。彼らに共通しているのは、過去も、現在も、未來もないことである。

今更キャラ紹介（前書き）

最後まで読んで下さった方、ありがとうございます。
ここでは今更ながらこの物語のキャラクターを赤裸々に紹介して
いきたいと思います。

ネタばれを含むので、未読の方は読むことをお勧めしません。
それでは今しばし、物語の残光をお楽しみください。

今更キャラ紹介

人物紹介

項目No一 佐野清十郎

身長194cm、体重65kg。長細い。不死人。祖父の家の蔵にて、不死の妙薬と思われるものの臭いを嗅いだことにより不死化。臭いを嗅いだだけだつたためか、不老ではないようで、きちんと齢はとつている。だからたぶん寿命でなら死ぬことができる。

幼いころにその体质故に両親からネグレクトを受け、心の傷に。そのせいか割とさびしがり屋。

ひょんなことから狐の封印を解いてしまい、一緒に住まうことにして最終的には「家族になつてくれ」などと告白まがいのことをするが、本人にそのような意図はなかつたらしい。

項目No二 狐

身長148cm、体重40kg。結構長い間、佐野の住む町の祠に封印されていた狐。封印された理由は不明。

なぜかいつも浴衣を着ており、十五歳くらいの少女の姿をしている。頭の横に狐の面をつけている。ちなみに狐の面を被つた状態は、正確には半妖化で、本来の姿は別にある。年齢は聞いてはいけない。見た目は佐野曰く、「見目麗しい」らしい。

自称頭脳派であるが、言つだけあつて飲み込みは早く、既に家事の腕は佐野よりも遙かに上になった。

誰に対しても慇懃な口調で話すが、堀田のことは嫌い、というより気味が悪いと思っている。

佐野に告白まがいのことをされ、一生傍にいる、といつ誓いを立ててる。

本人曰く、「普段見せない弱々しい姿に母性本能をくすぐられた」

そうだ。

項目ノ三 堀田正義

身長150cm、体重45kg ちまつこい。最後のキャラ紹介でやつとフルネームが出た人。下の名前はまさよし、と読む。佐野の大学の友人で、異常なまでの愛を妖怪に対して抱いており、常々妖怪に遭いたいを思っていた。

堀田の二度目の訪問時、狐は全身がぬるぬるしていく、そこからじゅうから触手が生えている何かに化けて追い返そうとしたのだが、堀田は迷わず抱きついた。

狐に遭遇したことにより、怪異に遭うことができるようになる。ちなみに彼が妖怪に遭いたがっていたのは、愛ゆえに、というのもあるが、他にも何か目的があるらしい。

項目ノ四 佐野の祖父

身長189cm、体重85kg 確実に遺伝。享年六十歳。祖母とは四十歳のころに離婚している。自宅にて不審な死をとげる。豪快な人物で、佐野を可愛がっていたが、死ぬ一年ほど前から塞ぎこみがちになり、家からあまり出ようとしていなかつたようだ。不死の妙薬があつた蔵の持ち主でもあるが、何故彼がそれを所持していたかは不明である。

今更キャラ紹介（後書き）

以上でこの物語は完結します。
ご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0670m/>

現代妖怪図鑑

2010年10月12日11時10分発行